

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成24年2月号

平成二十四年二月一日発行 第二十二巻第一号 通巻第 四八号 (毎月一回) 日栄社  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



鷹柱

高橋将夫

二枚ほどはがれてをりし鱗雲  
唐辛子怒り覚めても赤きまま  
水の色吸うて水草紅葉せり  
残菊の芯に余熱のありにけり

木の実みなころがる術すべを知つてをり  
妻と来しこの道花野へと続く  
荔枝裂け日蝕となる予感かな  
稲妻や絶対といふもろきもの  
有終の美はここにあり破れ芭蕉  
金風に包まれ槐は二十歳なり  
天宮の中心にある鷹柱

槐創刊二十周年記念大会三句

# 槐安集

水野恒彦

月光のたつぷりと降るか嬬が歌かな  
秋蝶を追ひてそのまま家を捨つ  
魂魄は流るるものぞ天の川  
亡びたるものら声あげ大枯野  
雪ばんば山なみ天の奥へ消え

延広禎一

抜穂して神饌となす豊の秋  
秋扇を共に開きし顔二つ  
曼珠沙華白に咲きみて炎立つ  
鬼の子の簀を抜け出す閻魔堂  
恋と冥の廻り舞台や近松忌



加藤みき

おさがりの似合うてゐたり冬うらら  
どの窓もだいたい色や冬の星  
魯田に朝のひかりの届きたる  
南十字の影を浴びたる鯨来る  
若水となりたる水を汲みにける

石脇みはる

とりけもの守る枯野の石佛  
寒紅梅坂の上にある母屋かな  
盆梅の枝ぶり褒めてゆきにけり  
丸四角庭師刈込む今朝の冬  
立冬や暴れん坊も父となり

中島陽華

アーナンダ瓢の色は赤漆  
掌のびなんかづらと熊野かな  
はくらくの千手千眼秋うらら  
大徳の月の光よ浮見堂  
靈松の支柱と小春日和かな

栗栖恵通子

あかあかと川の面明くる御講汁  
木枯や二軒長屋といふがあり  
枝先に鬼女の湯文字や紅葉山  
白猫に金の座布団冬日和  
シクシクと葛を詰めたる和紙袋

竹内悦子

寝かされて白き肌や酢蓮根  
浮寝鳥人遠ざけて集ひける  
柿もみぢ葉が穴だらけでも綺麗  
梟や大聖歎喜自在天  
月の暈ひむがしにあり寝に帰る

大島翠木

紅葉一群酒呑童子の浮沈み  
補聴器で冬の桜を見上げてゐる  
母郷とは白山茶花の散り敷く道  
しんかたる女帝陵なり冬紅葉  
十一月のチーズケーキや屋敷町

雨村敏子

近藤きくえ

梟の言祝栞る 槐歳時記

天地の恵みの彩よ柿たわわ

はるかなる思惟石露の花開く

再読の「俳話一滴」 秋気澄む

山霧を吸うて記憶を呼びもどす

シャンパンで祝はれてをり小鳥来る

焼栗の弾ぜたるところ飛鳥かな

吾を呼ぶや銀の風湧く芒原

天地や二股大根とお多福と

裸木のうちに秘めたる鼓動かな

本多俊子

近藤喜子

落葉踏むこの世の音をみな消して

木枯や足早に過ぎ去りしもの

男と女言葉を探す 山鯨

荒神の旅立ち波の三角に

真青なる空耀かす 七五三

白樺の目蓋あかるく山眠る

神の鯉ふはりと黄葉食しにけり

冬ぬくし何か失ひたる思ひ

天狼や生きるあかしの詩こぼす

さつぱりと灰になりたる落葉焚き

谷村幸子

賑やかに榎櫃を回し嗅ぎぬたり  
空也忌の竹のぬくみにふれてをり  
箒目の一直線や冬の宮  
千枚漬丸く納まる樽の中  
鉢の土入れ替へてをり竜の玉

瀬川公馨

柿山に件の男来たりけり  
冬空を打ちならしてや斗米庵  
ユニゾンの椋鳥の一樹となりぬべし  
斗米庵若沖  
ベル婆と安楽椅子とラフランス  
大池に摺り込まれたる照紅葉

久保東海司

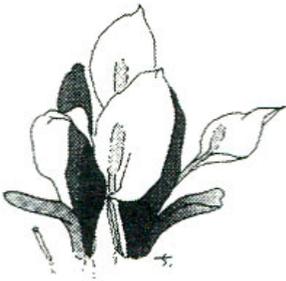
木の実独楽よろけ木の実に戻りたる  
祭壇の菊投げ入れよ棺の中  
北風の海礁いくりに波の伸びあがる  
小春日や轆轤新らたな壺を生む  
紅葉且つ散り陶窯を封じをり

西村純太

地震跡なの枯野に埋む冊子かな  
一茶忌の心の襷の雪螢  
狐火のひとつは売られしたましひか  
神様に逢ひにゆこうと冬の鴟  
白兔たえず誰かをだましをり

中野京子

朝の日が歌つてゐたり貝割菜  
もみぢ葉のあはひの日矢にのぼる湯気  
夕映えの公孫樹もみぢに身をさらす  
源流は冬日をとぼし高瀬川  
イヤリング冬灯にはづし高瀬川



# 槐市集

十川たかし

ふりむけば失せてをりけり月の鴨  
温石といふは聞くのみ温かし  
金山寺味噌を備へて冬に入る  
湯豆腐のゆらりと動き初めたる  
農家にはあらねど好きで蕪干す

竹中一花

広げをる風雷神図初時雨  
ねね様の寺やとろりと冬の風  
大根の湯気にくらくらしてをりぬ  
紅葉狩る北国街道湖近し  
湖の波黄金に明けて山眠る

田中信行

北京語の語尾弾むなり古都の秋  
相場師の寄進の札や紅葉散る  
釣り人に猫寄り添うて秋の暮  
マルクスの肖像画見る神の留守  
遠き国古き話や冬薔薇

谷岡尚美

秋暁や刻一刻の三上山  
学食へ小径の落葉踏んでゆく  
林檎食む歯に衣きせぬ少女かな  
山茶花の白浮き立てる落暉かな  
飴煮店だ秋のもろことよしのぼり



# 槐集

## 高橋将夫選

海鼠腸を確かむる舌ありにけり

葺屋川

前田美恵子

今もなほ生死の境蚯蚓鳴く

釣糸に風のほころび冬の晴

鷹匠の眼光鷹に劣らざる

三界を視野におさむる鷹一羽

鷹舞ふや吾が足跡の小さきこと

岡崎

岩月優美子

大根洗ふ心のくすみ消ゆるまで

寝姿のクレオパトラや冬の山

狐火のふはとオペラ座の怪人

白鳥に我が品格を省みむ

天空に夢を預けて木の葉舞ふ

悲喜劇の繰返しなり鱣の海

暫らくは湖の声聴く星月夜

神々の集まるところ冬紅葉

原点に戻れとやさし石路の花

露草に乱の色あり近江京

枚方

熊川 暁子

墨染を重しと思ふ枇杷の花

草の絮旅だつ楽土うたがはず

綿虫に山彦かへる日暮どき

影は皆冬の歩幅となつてゐし

湖の面の星を褥に雁眠る

京都

竹中 一花

あかあかと日の道湖に雁渡る

松茸を貰ふお辞儀は深々と

木の橋の次石の橋杜氏来る

冬カ<sup>サ</sup>ンナ緋は淋しさをゆり起す

マヤ暦果つその先の日記買ふ

守口

柳川 晋

新星の掠めてゆきぬ冬<sup>ふゆ</sup>日<sup>ひ</sup>宙<sup>ちゆう</sup>

携帯のアンテナ二本雪催

竹馬やいつか宇宙へ行く思ひ

星を読み月読み日読み神の旅

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」観照

三界を視野におさむる鷹一羽 前田美恵子  
鷹の鋭い眼光はなるほど広く深く全てを見通せるかもしれない。三界は欲界・色界・無色界、あるいは過去・現在・未来（三世）をいう。〈鷹匠の眼光鷹に劣らざる〉〈海鼠腸を確かむる舌ありにけり〉の句も秀句。

鷹舞ふや吾が足跡の小さきこと 岩月優美子  
鷹の雄大な飛翔に比べたら、自分の足跡は何と小さいことかというわけだが、そう言われると私もまた身につまされる思いがする。〈寝姿のクレオパトラや冬の山〉〈狐火のふはとオペラ座の怪人〉の句はなかなかユニーク。

天空に夢を預けて木の葉舞ふ 寺田すず江  
木の葉が枝を離れて何者にも束縛されることなく、無欲で宙を漂うさまが「天空に夢を預けて」の措辞からよく伝わってくる。〈神々め集まるところ冬紅葉〉〈悲喜劇の繰返しなり鱻の海〉の句はもの、この核心をとらえていよう。

露草に乱の色あり近江京 熊川 暁子  
やさしそうな露草の鮮やかな青は乱を予感させる色だという。咲いている場所が場所だけに、なおさらそう感じたのだろう。ちなみに、近江京は天津にあつた天智天皇の皇居。天智天皇崩御のあと壬申の乱が起こつた。〈墨染を重しと思ふ枇杷の花〉〈草の絮旅だつ楽土うたがはず〉の句には修行と浄土の世界がある。

松茸を貰ふお辞儀は深々と 竹中 一花  
人の好意に素直に感謝する気持がユーモラスに、いやみなく伝わってくる。  
〈悼 冬カンナ緋は淋しさをゆり起こす〉は心を打つ。

マヤ暦果つその先の日記買ふ 柳川 晋  
マヤ暦が終わる時、人類は終末を迎えるという。なのにその先の暦を買うという発想がユニーク。ちなみに、その日は二〇一二・二二・二二といわれるが、今は二〇一一・一〇・二八説が有力で、これだと終末はなかったということになる。

一山の音さらさらと落葉時 岩下 芳子  
落葉時の山の情景が何も飾ることなく素直に詠まれている。  
音消して満月の声聴きにけり 中田 禎子  
テレビを消すなど静かにして月を見ている様子がよく伝わってくる。

秋の花紫多しと母のいふ 近藤 紀子  
紫といえは桔梗や鳥兜が思い浮かぶが、青い童胆も、暗紅色の吾亦紅も紫がかっている。母上は紫がお好きだったのだろう。そんな母の言葉を作者は懐かしく思い出している。

石路あかりどこかに父の眼あり 谷岡 尚美  
石路の花明かりを眺めていると、どこかに父の眼差しを感じるといふ。石路の花に父との懐かしい思い出でもあるのだろう。そうでなくとも、石路あかりにはそんなやさしさがある。

(以下略)